徘徊するもの、盛に試驗制度の不都合を鳴すもの、蓬頭垢面の老生は、苦學幾年の辛酸に疲れて、敗殘の落人がなほ一戰と喘ぐが如く、青年紅顏の學生は、意氣揚々と、既に判官たり檢察官たり得たるが如く、皆この登龍門下に群居蟠動たる有樣を見て、あゝ、斯の如くして果して試驗に贏ち得るもの幾人ぞ、天皇の名に於て司法權を行ふべき機關となる以前、頭に法冠なく身に法服なき以前、人の生命財産の保護を托すに足るべき顏のありさうにも見ゆず、殊に自分はこれが第七回、七年の年月を經て齡も三十に近く、故鄕には老いたる父母がある、大阪には憐しい一人の妹が居ると思ふと、女々しけれども今更ながら、熱い涙がハラ〳〵零れる。

やがて、堂の彼方から試驗開始の鈴が勇しく鳴り響く、二千人の諸生は我先にと手に番號の紙片を持つて、N字形に曲つた階子を、二階三階にぞろ〳〵と、登つて行く、基もこの一人、五百番より七百番までと記された一室に入り、高い俎卓子に向つて腰を卸し、配布られた答案紙を準備して、時計の針の進むを待つ程もなく、九時の響が一つ二つ鳴つて、第三點は耳に入らず、老巡てもお



役所の威光を苦り切つた顏に占めたる監視の小役人が高く向ふの壁にぐる〳〵と卷き納めた掛抽の如き問題案の緒を切ると、全幅の洋紙は飛瀑の如くサッと流れて、墨痕勇しく二三の問題が見はれた、と同時に、拍手喝采の響は堂に滿ちて、矢なみ稽ふ武士の小手に、たばしる急霰と暫時は鳴りも止まなかつたが、如何してか、基は俄に眼が眩んで問題を讀むことが能きぬ、この場合にもお琴を思ふて、喘げば喘ぐほど尙更心に苛つて、大聲に叫ばうとすると、耳元に消魂しい聲があつて、

「兄さん！。兄さん！。」と叫ぶ。

はつと驚いて眼を開くと、燒け盡して形もない出入橋の派出所の邊に自分の身は倒れて居るのであつた、しかも背後から自分を抱いて叫んでゐるのはお琴で、前から手を執つて居るのは小六であることに氣が着いた。

「あー お琴か、あー 小六さん？。」

基が憎然と光もない落ち凹んだ眼を圓にして、なほ兩女を怪しんで、斯う叫んだ聲は、全く枯れて、寂れて、濁つてゐる。

「まあ、兄さん、私、喫驚しましたわ……。」

お琴が宿屋の赤い提灯を突き出すと、基は瞠然と立ち上つた。制服は泥に塗れ炭に汚れ、白いとはたゝ名ばかり、焦げてもゐる。裂けても居る。その焦げも汚れもしないものは、縷をばしかと頤に取つて冠つた帽子の、櫻花の抱いた日章ばかり。この黒い脚袢に新しい草鞋を引き締めた姿を見て心弱いお琴はうろ〳〵と涙聲であるけれど、俠骨の小六は、なか〳〵に凛々しい男子の權威を見惚れて、

「本地さん、安心おしやす、妹はんは私が慥に預りました。宿所は築地の東屋といひます宿屋だす。藝妓やとて、これでも……。」

問はれもせぬに自分の素性は、制へて制へても、平生ですらともすれば口に出でんとするものを、今この奮闘の勇士が前には包みきれず、

「鬼貫少將の娘だすッ……。」

、言ひ放つて一時に胸が迫り、覺ねず手巾に涙を包むと、

「あゝ、さうですか、どうか宜しう……。」と、基が擧手の禮を行はうとすると、



如何してか、そのまゝ顏を掩ふてまた倒れた。

北區一萬三千の民家を烏有に歸せしめ十數萬の罹災民を出したる大火後今日三日、月の光は大空に蒼白く、下福島の空にはなほ殘燼が盛である。

## 第五十四回

その朝基は朝餉をも認めず、直に東天滿の現場に駈けつけて、火災の消防に避難民の救護に、一日一夜一睡もせず、都會慣れない可愛の妹が身の上、眉に火の附く急場にも忘れはしないけれど、それすら顧る遑もなく、下宿も燒け、本署も燒け、僅に鎭火の報を聞き、臨時本署たる中の島公會堂に引き揚げると親に離れ子に離れ、途方に暮れてたゝ彷徨する幾百千人の罹災民が、泣くに涙もなき憐な狀態を見ても眠られもせず、因嬾れ果てたる他の同僚の二三子と共に、公會堂の片隅に倒れ、僅に一二時間を憩ふや憩はずに、再び餘燼の消防に從ひ、殘燼と烈日とに、肉と血とは盡く汗となつて融け盡くさん盡日の奮鬪をば與へられる團飯に命を繋いで、夜間はなほ白煙を噴き出す所在の倉庫を防ぎ、

憎むべき窃盗どもの徘徊を警め、そのまた翌日、九十九度の酷暑にも服を解かず、暮れて再び出入橋方面警戒の任に當つたが、久しく我が勤務めなれた派出所も亦、何の跡形もなく焼け失せて、煉瓦や敗石やが、折柄の月明に照されてゐるのを見ては、下宿を失ひ本署を失ふたよりもなほ悲しく、倒れた電柱に腰を卸し、焼け殘つた障壁に脊をもたせ、一人思ふまゝの感慨を肆にすること暫時、草鞋の緒を結び直したまでは記憶にてゐるが、引き續く疲勞にツイ夢の人となつたのである。

アッと顔を掩ふて倒れた基を、小六走り寄つて抱き起して見ると、胸部といはず腕といはず、鮮血は淵々と流れてゐる。

「いゝ、大丈夫です、逆上しました眩血です……。」と基は自ら、破壊せられた水道栓の盛に霧を噴いてゐる邊に駈け着けると、小六は後れず走つて行つて、その白絹の手巾で基が頭を冷してやる。事に慣れないお琴はたゞ、「兄さん……、兄さん……」とうろ〳〵するばかり。

眩血はやがて止まつた、基は再び帽子を冠つて、寂しさうな笑顔を白い月に



見せ、改めて兩人を見比べながら、

「どうも小六さん、大變なお手數を懸けました……。お琴！。」

お琴が手にしてゐる赤い提灯を自分に取り、妹の顔を照して覗くやうに、

「無事でゐたか……吃驚たであらう。」

「まあ、兄さん、私何ぼう心配したことでせう……。」

此處に小六が居なかつたなら、お琴は兄に取りついて大聲に泣いたであらう。

小六はこの兄妹の友情ありさまが妬しいほど羨しく、鬼貫少將の娘だと言つて見ても、何の感もなさゝな、基が却て憎憎しい心地もして、

「本地さん、姉はんは今日で三日あんたはんのことばかり言ふて、泣いてばかり居やはりますの、今日はね私と一緒に、焼跡を弔ひに來まして、警察のお方と見ますと、兩人であんたはんのことばかり聞いて見ても、少とも分りまへんやろ、もう歸らうと思ひましたが、も一遍此處の交番所の跡へ來て見やうと、今此處まで來て見ると、あんたはんが倒れて居やはるので、ほんまに吃驚しましたわ……。」

「あゝ、さうでしたか、この混雑で、歸るべき宿もない職務の身です、何れ四五日中に、お禮にも參り、妹をも迎へに參りませう、それまでどうかご面倒序によろしく頼みます。この場合ですから、これで失敬します……。」と、基は何處へか走つて行かうとする。

「アヲ兄さん！。」

お琴は呼び覚けて引き止めた。

## 第五十五回

妹をよろしく頼みますとは、小六に取つては嬉しい言葉であるが、四五日の中に迎へに參りますとは、何だか自分を輕蔑んだ心のやうに請取られて、感情強き小六はッンと反撥た。

お琴は基を呼び止めて、

「兄さん、ちよつと待つて下さいよ」と、懐から小さい包を取り出し、

「私、兄さんの書物も着物も、みんな焼きました。濟まないわ。勘忍してよ。



たつたこの、兄さんの大切な筆記帳だけ取り出しましたの……。」

「あゝさう、これはあの、書物から何年かかゝつて抜き書した大切な筆記だ、もうこの外の書物や着物が焼けやうと亡失ならうと、いゝさ、いゝさ、焼けた方が反て善い。」と、その小包を取つてちよつと頂き、直に制服の下の腹に卷き、

「お前、着物は？。」

「皆焼いて……、焼けても私搗ひませんわ。」

「おゝ、搗はない搗はない、負傷もしないのがお互に結搗だ。」

「兄さんは何處にいらつしやるの。」

「そんなことどころぢやない、四五日中に迎へに行くから、小六さんのご厄介になつておいで。」

そのまゝ綾橋を渡つて何處へか行く。

小六は自分が身の寶たる、多くの着物や道具を焼いて、女らしう惜しみもせず、今日も出會ふた朋輩達が、愚痴を溢して泣くのが口惜しかつたに、大事な試験を眼前に控へて、あの狹い六疊の机の上にも小床の上にも、山ほど積み堆

ねてあつた書物を惜し氣もなく燒けた方が反つて善いとは、何といふ氣味の善い方ぞと、思はず手を拍ちたいほど嬉しく、男子ならば斯くてこそ、あの一冊の古手帳が、妹の手から頂かれると見るにつけても自分が小指に欲めて居た指環を、嬉しさうに頂いて出て行つた兄の薫が情ない。

「姉はん。」と、小六はお琴に取り着いて、しかとその手を握り、

「私、ほんまに、ほんまに、本地さんの氣達が嬉しうおますわ。」

「ね？。」

お琴にはその意味が解らない。

「本地さんは屹度試驗に及第しやはる。」

お琴は意味の解らぬまゝに、及第と聞くのが嬉しく、

「何故でございます？」怡然すると、

「いね、私、そう思ひまんの、屹度、及第しやはる、及第しやはつて家い判事さんにおなりなら、第一ばんにね、小盗人なんかより、弱いものをば十分虐め、強いものには賄賂を贈つたりなんか、外では立派なお顔で、内では賤しい〳〵



心の富家やとか、議員さんやとか、片端から重い罪に言渡しなはるやうにお願みしたいわオホヽヽ。私その時は、屹度、屹度傍聽に行きますわオホヽヽ。サア、歸りまほ……。」

小六は身も心も勇しく自分に赤い提灯を持つて、新地の燒跡を電車道に通ると、威嚴を誇つた富家の高樓も、繁昌を極めた商店の大厦も、たゞ一夜の裡に亡び盡して、石の柱や鐵の骨のみが、天に向つて峙つてゐる有樣が、羅馬古城の敗墟を繪に見るやうな。

お琴も小六も、もう心にかゝることはない、中の島から伸に飛び乘り、築地の宿に歸つて見ると、肥に太つた氣輕な例の女將が、にこ〳〵しながら、

「小六さん、小六さん、喜びなはれ、黒崎さんから、ソレ、アノ箪笥や行李や長持やあんたはんのお着物を取り出してこの通り……。」

指さす玄關の山なす荷物を見て小六は知らぬ顔に、

「燒けたかてかまやしまへんのに、黒崎さん入らんこと！。」

美しい眉を蹙めた。

女將は驚いて目を瞬る。

## 第五十六回

毎日々々引き切りもなく訪ねて來る朋輩や女將の親切は嬉しいけれど、小六はその甲斐ない罹災の愚痴の繰言を女々しう聞くのが厭でならず、殊に黒崎から屆けられた自分の着物や道具はそのまゝ宿屋の女將に預けて、自分の室にも入れず、まして一言の禮も言ひ送らず、須磨は景色が佳いから其處の別莊に來ないか、濱寺は閑靜であるが其處の別莊は氣に入らぬかと、度々電話や使者を遣こすのをも、悉く宜い程に謝絶つて、お琴と共に東屋の一室に爲すこともなく日を送つてゐたが四五日を經て、基はお琴を迎へに來た。

基は懇懃に小六が少からぬ親切を謝したが、小六はこの時、自分ばかりがただ一人、孤島にでも取り殘されるやうな心地がして、言ひ知れぬ心の寂寞を感じ、また兄妹が睦じく、別けてお琴が嬉しさうに、「兄さん、兄さん」と呼ぶのが妬しく、なるならば、このまゝ去なせともなく思つた。



基は多くを語らぬ、借りて着たやうな肩行も身丈も狹く短い浴衣の姿不細工にやがて歸らうとした時、二階の階子に、女將が肥り太つた莞爾の顏ばかりを見はし眼に何やら物語せて、小六をちよいと〳〵と手招く。

小六は何心なく、トン〳〵階子を降りて見ると、こは何事ぞ、古けた麥稈帽子片手に、汗臭い白リンネルの脊廣服着て、槽然廊下に佇立んでゐるのは、滿洲に行つた筈の兄薫であつた。

小六は一と目見るより呀と叫んだまゝ一歩二歩背後に逡巡ぎ、烈しい痙攣のやうに全身を顫はせてゐたが、

「君ちやん！。」と呼んで悄然と首を垂れて薫が廊下の板に、ハラ〳〵と涙を滾したのを見て、憤怒は赫と一時に燃ね立ち、

「その身裝は何だす！。」

衝と薫が側に突進したと見ると、矢庭に麥稈帽子を引つ奪り、烈しく廊下の板敷に投げつけ、

「私が男でおましたなら……、私が男でおましたなら……、勘忍しませんせ、

兄さん……。」

その臙脂のやうな唇に角立てゝ、奥歯をキヽキヽと噛み締める容色の、美しいだけ一入凄い。

薫は少しも爭はない、怨めしげに小六が顔を見遣つた兩眼に涙をたゝへ、

「叩くとも、撲るとも、君ちやんの思ふ存分にしてくれ、どうせ僕は自首する身だから……。」と、またその長い首を垂れる。

「自首？。自首！。自首するほどの惡いことを、兄さんまた何處で爲なはつた。こゝは滿洲ぢやおまへんわ……。」

「滿洲ではない、もう警察の警戒が嚴しくて、滿洲へは迚も落ちられないから、廣島からまた引つ返して、おなじ自首するならば大阪でと一昨日歸つて見るとこの大火で、君ちやんを捜したとも捜したとも……。」

「嫌だす、私、嫌だす、自首するなら直ぐ警察へ行きなはれ、此處は私の屋形ぢやおまへん。私、兄さんの妹ぢやおまへん。お母はんこそおなじでも、私は……。」

少將の娘であるぞと、言はふとするともう胸に涙が堰かれて、小六は無念で



殘念でならず、今が今とて、他人の可愛いゝ妹ながら、お琴を取られる心の寂寞しい折柄とて、ワッと袖を噛み締めて階子段に泣き着いた。

「まあ、小六さん、如何しなはッたの……。」

女將は障子を開いて覗く。二階のお琴が何事ぞと、徐に階子を降りて來る。

## 第五十七回

「姉はん、姉はん。」小六は降りて來たお琴が手を捉へて、

「この人は、私の兄だすが、嘘ふてやつておくれやす……。」と、なほ動きもせず、佇立んでゐる薫に向ひ、

「兄さん、自首とは善い心懸けだす、妹を欺罔して嘘言を吐きなはる時はまだ、心の迷が取れなんだ時だす。おゝさう、あんたが女の髮かなんかを冠て、出入橋で騒動しなはつた時の本地さんがゐやはります、サア、自首しなはれ自首しなはれ。」

薫が手を取つて引き立てる。薫は力氣なげによろ〳〵と倒れやうとした。

「小六さん、如何しやはりましたの？。」
柱に凭れて呆れてゐる女將には目も呉れず、
「姉はん、姉はん、本地さんを呼んでおくれやす……。」
氣も狂はしい小六が聲を聞いて、基が何事ぞと降りて來る姿を見るより、
「本地さん、本地さん、この人はお捜索者だす、自首すると言ふてゐやはります、お氣の毒だすけれど、警察へ連れてゝおくれやす。」
もう小六は身の謹慎もなく取り亂してゐる。
薫は基が顏を見るより、ワナ〳〵と戰慄ひ出して、見る〳〵血色はなくなつた。
「君、如何しました、何事です？。」と、基が近寄つて徐に穩に訊ふと、
「僕は南薫です、罪があつて自首するものです。自首する前に妹に會ひに來たのです……。」と、不安の裡にも沈着いた言葉は、決して狂者とも思はれる樣子はない。
「さうですか、自首なさるならば警察へお出でなさい、全體如何いふ罪を犯されたのです。」



「それは警察で申上げませう、何分にも白昼大道で捕縛せられるのは嫌ですから貴下がその筋のお方でしたら、如何か御署へご同行が願ひたいものです。」
「よろしい、一緒に參りませう、小六さん、あなたにはご異議はありませんね。」
「どうぞ……。」
とは言つたものゝ、しほ〳〵として柔順に行かうとする兄の姿を見てはもう其處に居られなくなつた、小六は泣き號ばう爲めに、二階へ駈け登つた。
基は深く小六の情を思ひやり、お琴にはもう一夜だけ、此處で小六を慰藉るやう言ひ殘しておいて、薫を本署に引致したが、薫は少年の時から有らゆる放蕩を爲し盡したけれど、罪に問はるべき犯行とては、あの夜同類の前科者を伴夫の姿に裝らへ、自分は蝶々髷の鬘を冠つて令嬢風の姿に變じ、東區の某時計店で金銀の時計二三個を掻浚へたといふ、小泥棒の外にはまだ何もなかつた。
翌日改めてお琴は、北野邊りの兄の下宿に引き取られたが、小六は悲しく寂しく、東屋の一室に籠つて、空しく流れて行く淀川の水をのみ眺めて居るのが厭でならず、さればとて世に便とすべき人は一人もなく、病院の母が室に引つ

越してしまつた。

そのわかれ〳〵となつた後も兩女はしば〳〵來往してゐた。

大火の燒跡も漸く秩序が立つて、小六も故の悲しい跡に形ばかりのバラックを設置へ、母と二人で引き移つた九月の上旬、基は作文試驗だとて東京に登つて直ぐ歸つたが、十月の初旬には、筆記試驗だとてまた上京し、越ねて十一月目出度い〳〵天長節の翌日、此次こそ及第落第の別れる口述試驗だとて、勇んで三度上京した。

小六はこの時、罪ないお琴に斯う敎へた。天神樣は學者の神樣である、その靈驗のあらたかなことは、大火を免れさせ給ふたのでも著だ、盥齒してお願ひしたなら屹度兄さんも及第なさるであらうと。

## 第五十八回



小六は固疑りに疑つたる天神樣の信心家である。素かつたお父樣はお父樣とも知らなかつた間に名譽の戰死を遂げられた、あまり行儀正しうなかつたお母さんはお母さんらしい心地がせぬ、攻めてもと思ふ兄の薫は放蕩である、その他に親類も緣者もない身は、世に便として縋る人のない淋しい感に、稼業柄として疑り性の、天神樣ほどわらい神樣はないと信ひ、毎月のお祭日の外に三度五度は、必ず天滿のお社に參詣し、どうぞ無事息災で暮しますやうにとも、どうぞ人樣に憎まれませんやうにとも、また或るときは、母の病氣の癒るやう、兄の行狀の改悛るやうにとも、黑崎さんからお聘のないやうにとも祈つたこともある。

お琴はまた、兄を及第させたいより外に、何の願も志もない、兄さんが及第さへして下さつたなら、お父さんもお母さんも大喜び、お淸姉さんも大喜び、家に借錢が少々出來たとて厭ひはせぬ、今年は屹度、屹度、及第して下さるやうにと念ふ赤心から、小六が天神樣のご利益を說いて、盥絕の祈願を勸めるをば、疑ふところもなく信じた。

基が口述試驗の爲め、三度上京したその翌朝、お琴は眠られぬまゝに早う起

きた、これから天神様へお詣りせうかとも思つて見たけれど、その道筋さへ分らない、ひとり、とつおいつの折柄、小六は伸で駈け着けた、サア、これから、兄さんがお歸りなさるまで、毎日お詣りしませうと。

お琴は、しみ〳〵と、小六が親切に泣かせられた、そして二女は、北野邊の陋隘い路次の下宿を出た。

大火は盛夏の七月晦であつたが、天長節も一昨日と過ぎて、秋も漸く深い季節となつた。大阪はまだこのやうに小春日和の暖いが、故郷ではもう稻の刈り上げも終つて、可部坂峠の絶頂には、もう霜も霰も降るころ、背戸の柿も赤く熟したから、二三日の中に贈つてやると、母のお袖の名で父の六郎治が書いた手紙と共に、昨日届いた手織木綿の袷を着ると、親のご恩が他國で身に泌みて、今朝まだ暗きに、兄の爲めに神詣する身の、涙まづほろ〳〵と滾れる。

そのなよやかな、姿も、正直な心も、小六にはあり〳〵と見ねて、斯んな罪ない嬢さんが、またとあらうかと思ふと、胡弓は弾いても、歌は歌つても、心の奥の寂寞い〳〵彫像を、此方からも持つて行き、彼方からも頼つて來るやう



な心地がして、もう他人とは思はれず、手を取り合ふ妹のやうに。

朝は、燒跡の塵埃も立たぬしつとりと濡つた板圍の間を通り抜け、お琴には これも愛かれる天神の表門に着いた。

口を漱ぎ手を盥ひ、二人は本殿の階子を登る。

内陣の奥深く暗く、燈明細う神さび在せる御前に、小六先づ鈴を鳴して、涼しい拍手を供へて額いた。

お琴は、佛をも信じ、神をも尊ぶ、されど、神にも佛にも、何の願をも願つたことはない、願ふはこれが初めてゝある。

專念專意、願ひ終つて、二人は境内を散歩き初めた、信心の人々は漸く詣つて來る。

その時小六は、斯う尋ねた、

「兄さんが試驗に及第しやはりましたなら、大阪の裁判所で判事さんになりやはりまんの。」

小六は、基が斯くあらんことを待つて居るのである。

「いゝね、兄は故郷へ歸りますの。」

と、お琴は兄の身の上を語つた、是非ないことゝ思ひながら、小六は太息を吐いた。

## 第五十九回

麓の雜木林が全く枯れて、楓の落葉が寒い〳〵風に吹き捲くられ、倉の廡から玄關まで、カサ〳〵と寂しい音を立てゝ走つて居る。今年もはや暮れて十二月の上旬、溪川の水いよ〳〵清く冷たく、長助老爺が拵へた筧に霜消ねず、昨夜可部阪峠の最高峰、陸地測量部の三角點の邊が白く見ねた一日、お清は嬰兒を脊中に負ひ、瓦人の弟の金太郎を伴ひ、慌たゞしうお琴が家の本地家を訪ふた。

風の子とはいひながら、この吹く風を寒がりもせず、熟した李のやうな頰べたに、圓い眼を活々と朝から晩まで惡作な潔は、脊戸の藪から長い篠竹を切つて來て、物置部屋の入口に座り、大きな鋸を持ち出して、しきりにゴシ〳〵とやつてゐるが、どうも鋸は潔のまゝになりさうもない。



折柄自分よりは二歳も上の金太郎が、指を咥へてやつて來たのを見て、

「オイ、君、金太郎君、失敬だが君この竹を斯う壓へてゐてくれ。」

見るから愚鈍の金太郎は、潔と頭も擦れ〳〵に蹲んだ、金太郎は鋸よりは潔の命のまゝに從ふから早速竹を壓へて、

「君、何を拵へるのだい。」

「笛だ。」

「笛？。君笛を能う拵へるかい。」

「見て居れ、オイ、シッかり壓へて居れ、動くやい。」

金太郎を叱り捲つて漸く鋸が用を足したので、錐や小刀を持ち出して切つた竹にまた穴明けの手傳をさせ、スー〳〵と吹いて見ても鳴りさうにない。反つてこの間に金太郎が糸を持ち出して拵へた竹弓の方が面白く、

「オイ、君、その弓とこの笛とを交換て呉れんかい。」

「嫌よ、僕はこれで雀を捕るから。」

金太郎が頭を振ると、

「雀、雀なら僕が君よりも捕ることが上手だ、笛を吹くことは僕より君が上手だ、トレ、ちよつと僕に貸して見せ、貸して見せ。」

厭應なしに引つ奪り直に小竹の矢を番へて雀を捜しに、金太郎を從へ、隣家の竹藪の邊を駈ぎ廻る。

「坊つちやん、悪作だな、雀には羽ががんすよ、坊ちやんの矢が中りますかい。」

門前のたら〳〵阪を登りかけた年若い郵便配達が、斯く呼びながら、着たる赤毛布の下の革袋から、一枚のはがきを取り出しにこ〳〵と、

「坊つちやん、あなたのお家へでがんす、持つて歸つてつかさらんか。」

「ね？。はがき？、何處からじや、大阪からなら僕が持つて歸るが、他からなら厭だい……ア、あの梅の木に雀、雀……。」

潔は其處の杉の生垣の蔭に沿ふて、走つて行かうとしたが、

「大阪からでがんすよ、若さんとお嬢さんとがお歸りますと。」

「ね？、ほんとかい、嘘言つたらこの矢を中てゝやるよ。」

「アハヽ、嘘ぢやがんせん、この通り……私はこれからまだ外處へ廻らねばなりませんがもう日が暮れますからな……。」

潔は一枚のはがきを請取つたが、基が走り書した文字は能く讀み能はぬ、けれど兄さんと姉さんとが歸るといふことに相違なきを見て、忽ちその弓と矢とを道の傍に抛げ捨て、

「君、僕はこんな物は入らんよ、君に返してやる君勝手に雀を取るが善い。」言ひ棄てゝ一散に家に駛せ歸り、

「お母さん、お母さんと！。」大聲に呼び立て、「大阪の兄さんと姉さんとが歸ると……、兄さんは試驗に及第してか。」

## 第六十回

米が餘りに能く出來過ぎて、直段の上では反つて昨年の中作よりも收入が少ないけれど、それでも先づ〳〵結構な年ぢや、苗代の初春から田の草掻きの土用の空、戰爭ほど忙しかつた秋の收穫も、この冬の廩の豐な藏を見ると、家外に、風が吹き荒ばうと、やがては雪が何程降り積らうと大丈夫である。薪まで

山の如く下男と長助老爺とが伐つて來て、倉の側から家の雨垂れまで積み重ねて呉れた。もう心安く、また年一つを目出度く迎へるまでだと、六郎治は二三日前から惹いた鼻風邪を言草に、裏座敷の六疊の間の炬燵に潜り込み、赤い毛布を頭から背に冠つて、時々大嚏をしながら、古い寫本の大阪軍記をば、小聲に面白い節を附けて讀んでゐると、

「お父さん！。お母さん！。」

仰山な大聲を叫び立てゝ玄關から飛び上り、バタ〳〵と走つて來て襖を引き開け、呼吸も喘ぎ〳〵見れたのはお清である。

六郎治はその慌しいお清が態度に喫驚して目鏡を取外し、書物を閉ぢて、

「お清、如何した……。」と、起たうとする。

「いへ、お父さん。眞實でせうか……。」

お清は自分が脊負ふて來た嬰兒を自ら卸して、六郎治と相對ひに炬燵に倚りながら、たゝそわ〳〵と沈着かず、目の色さへ變へて、例の甲高い大聲を、

「こんな噂がありますの。基が今年は試驗に及第しましたと……。」



「ね！。及第？。」六郎治は毛布をかなぐり捨てゝ跪く。

「私、もうあなたへは基からかお琴からか、電信でゝも手紙でゝも通知が來てゐさうなものと思ひまして、走つて來ましたの、未だですか。」と、取り上げぬ丸髷は勢込んで語る毎に、左に右に搖り動く。

「いやまだ來ぬが……、何處でそんな噂を誰がする？。」

六郎治は次だばかりの煙草に火も附けず、劇しく側の火鉢を叩いてせきこむ。

「實はね今日瓦人が村役場に行きましたら、ちやんと基の名が官報に載つて及第としてありまして、役場では大評判でしたと。私、瓦人に何遍も聞き直しましたが、やつぱり本地基で、二番の成績ですと……。」

「ね？。官報、官報なりや間違ひなしだが、基め、何の通知もせんぢや、二番の成績といふと、人違ひかな……。」

六郎治が白髮の頭を傾げると、お清は太息を吐いて、

「ねね、お父さん、お琴までが默つてゐて通知もしないのが不思議でせう。」

折柄、門に大聲があつて、潔が、

「お母さん、お母さん、小さい姉さんと大阪の兄さんからはがきよ。戻つて來るつて……。」

その聲を聞くと等しく、お清は起つて次室へ走り出で、潔が手のはがきを引つ奪り、

「あら、お父さん、お母さん、はがきですよ、――兎に角及第いたし候間、近近の内歸國の考へに御座候……。」と讀み上げた。

お袖は臺所から手を拭き〳〵來る。炬燵の上には四人の頭が覗き合ふて、一枚のはがきは幾度も〳〵讀み反された。

「まあ、ほんとに、お琴はわらい娘でがんしたなァ。」

お清は今更この夏の夜のことを思ひ出し、それから後も度々來ては嚴しく言つた身を愧ぢ、且つ基が及第に伴ふ家の名譽を思ひ、

「なあ、お母さん、私、お琴には帶を、基には袴と羽織とを祝儀にしますわ」。

と六郎治よりもお袖よりも、先づ第一に自分がほろりとした。

お清は直に自分の家に歸つた、途ではわざ〳〵長助老爺の許に立ち寄り、歸つては、良人の仙次郎を始め、下女や下男や小作等に向つて盛に吹聽した。基が及第を喜ぶものゝ中で、お清が最も喜んだであらう。



## 第六十一回

十二月の中旬、降つて見たり霽れて見たり、寒い北風に交る時雨の朝、廣島驛に着いた下り列車の三等車から、一際目立つ圓髷の美人が、十數人の人々の中からいそ〳〵と降りた、それは小六である。續いてお琴、基は一番後から、大島紬の羽織袷、鳥打帽を眉深に冠りロングコートを抱へながら降りて出た。

基が數個の行李と鞄とを請取つて、それを驛前の運送店に托する暇に、小六は直にお琴が手を牽いて、饒津の宮の松原撥き、本安川の綺麗な流に臨んである旅人宿の表二階に上つた。

新婚の嫁ど寮が結ぶべき頭の髷には、珊瑚の珠が聯なつて居る、赤い匹田のてがらも燃にてゐる、金蒔繪の笄も輝いてゐる。知らぬ人には、これから密月の旅行かとも見ゐるであらうが、小六に取りては、これが悲しい〳〵、父の鬼

貫將軍が戰死の跡を尋ねて、滿洲の嚴冬を遼陽に向ふ一人旅なのである。

不屆な兄蕉は今は鐵の獄に囚へられてゐる、富豪からは何につけても迫害を受ける。空しく燒盡された北陽のパヲックに秋風が吹初めてからは、其以前の全盛もなく、其美しい面影のみ、泥にも塵にも染らねども、有つて生れた其俠骨から、柳巷を變てまでその嬌名を競はふとは少しも思はず、朝の雨漸く寒う夕の月いよ〳〵氷の色となるにつれ、人知れず其身を泣きながら空しく日を暮し明すと、基は試驗に及第して、妹のやうに思ふてゐたお琴を引き連れ、安蘐の山奥に歸つてしまふと聞き、何とも彼とも、言ひやうのない寂寞を感ねて、現在病身の母はありながら――世はもう自分が一人法師、誰を便に細き糸を彈き冷き皷を打うぞ、ならば、度々お琴が談話に聞いたことのある、三里の山道に人里もない可部阪峠とやらの絶頂の、一軒茶屋にでも住居して、上り下りの旅人に草鞋を商ひ、寂しい寂しい自分のこの心を、いとせめて、麓の村のお邸宅の烟を、眺めて〳〵死んで、何にも言はず、そのまゝ烟となつてしまひたいとも思つたが、そんなことの出來やう筈もなく、さらばとて、歸る二人を



見送つて、そのまゝの離別は惜しくて堪らず、こゝに世に亡き悲しい父將軍の墓を弔ふための旅行となり、母の止むるをも肋妓の留むるをも肯かず、昨夜基とお琴とが歸る列車に飛び乘り、今廣島まで來たのである。

あゝ、この半歲は、小六に取りては實に夢のやうな月日であつた、見もせず聞きもせず、緣も由緒もなかつたお琴と、斯くまで離別れ難い間柄とならうとは、如何して思ひも初やうぞ、それが今此處で、數時間の後には袂を分ちて、また會ふことのありやなしやも知られない、分れ〳〵とならねばならぬと思ふと、知らぬ滿洲とやらの旅の空も、また歸つて來べき大阪の土地も、何の歡樂とてもない暗黑い深夜の心地がする。

大火も別に悲しまなかつた、蕉の囚へられたのも、今は左までは悲しとも思はない、たゞ、お琴と共に基の成業を禱願に、天滿のお社に參詣した時、基が故鄕へ歸ると初めて聞いたとき、何ばう驚きもし悲しみもしたであらう、田舍へ歸らはつたとて仕樣もおますまい、大阪で窠い判事さんになりやはる樣にともお琴に勸めた、あれだけ勉强しやはつたのやさかい、攻めて二年なり三年な

りでも止まりやはる樣にとも勸めた、あんたはんも折角お越しやしたのやものの兄さんを止めてとも手を合せた、併し基が故郷へ歸るといふ決心は少しも動かなかつたのである。

小六はこれから、譯もなく、さびしい〳〵心の人となつてしまつた。

## 第六十二回

髮は斯う結つて見たくて結つた。基が署長や同僚の多勢に見送られて、ドヤドヤと停車場に來た時には、わざと人目を避けて居た、さうして列車の中に居つては、お琴と二人ひたと竝んで離れなかつた。

「なァ、姉さん！。」

小六が言葉は濕めつてゐる、旅人宿の下婢が持つて來た厚い座蒲團の上に坐つて、向き合ふた中の桐水鉢の上に、小六は優しい左手を延べて、しかと、お琴が右手を握り、

「私な、次の列車で下りまんの、滿洲へ行きまんの、私、ほんまに厭だすわ、



姉さんに別れますのが……。」

大内お召の半上衣が、前でパラリと左右に開けて、千草お召の上着下着、高涙織の丸帶に、若松崩の模樣が見ゐる。

「忘れては厭だッせ……。」

忍び忍んだ涙がほろりと落ちるを、慌てゝ、純白な手巾に拭ひ、暫時は何とも言はず、その白い顏を、寒紅梅の模樣深き鞠段縮緬の襦袢に埋めてゐたが、急に笑顏となつて、

「これを私やと思ふておくんなはれや、そして手紙をよこしておくれやすや屹度、屹度、妾命があつて滿洲から歸りましたら、必ず手紙を上げますわ。」

小六は、その指環の一個、小さい眞珠の輝くのを、お琴が指に箝めて、

「また、兄さんと一緒に、兄さんと一緒に大阪へ來ておくんなはれや、そして次の列車まで、一緒にな……。」

と、お琴が手をまた握り締めた。

心弱いお琴はたゞ、泣くばかりである。その母のお袖から送つて貰つた伊勢

崎縞の綿入と羽織と、姉のお清が長々しい假名文字の詫狀と共に、「祝」として送つた羽二重友禪の草模樣、見る目も若々しい帶を締め、初めて大阪に來た折のまゝ、少とも都會の華奢に染まず、兄に成功の名譽を搶はせた誇も見ねず、たゞ〳〵、可部坂峠の奥の故村に歸るをのみ喜ぶ裡から、離別となると、何ごとも得言はず、盤に伏しついたまゝ大束髮を顚はせて泣いて呉れるその赤心が小六の胸には華々と應へて、共に泣く音を抑へかねて、等しく伏しついた。

時雨はまたバヲ〳〵と降つて來て、二階の硝子障子を叩く、松原續の老松は啾啾と風にさけぶ、もう全く冬の辭である。

「滿洲はもう雪でございませうね……。」

小六が寂しい一人旅の前途を憶ひやると、戰爭の話で聞いた滿洲の、もう深からう雪の中へ、それも存命てゐられるお父樣を尋ねてならば、飛び立つほどに嬉しからうものを、お父樣とは生前知らず、皇國の爲に討死なすつた處を尋ねて遥々泣きに行かれる身の上よと思ふと、傷はしくて堪まらない。

「姉さん、悲しいこと言つて下さいますな、手紙を上げますどころぢやございませ



ません、一應、兄と一緒に故郷に歸りまして、また屹度、天神樣へお禮の爲め、二人で必ず參詣しますよ、兄もさう言つてゐましたから……。」

お琴は、兄の及第は、天神樣のご加護だと信じてゐる、小六と共に毎朝參詣したことも基に語つて、再び兄妹連れ立つて、お禮の爲に參詣せうとは、昨日大阪を立つ時にも、堅く兄に誓ふたのである。その時が來るならば、必ず小六に會はうとは、お琴がもう今からの願である。

小六は膝をすり寄せて、

「忘れては嫌だつせ、その事を……。」

と、更にお琴が手を握つた。

## 第六十三回

離別が惜しくて旅館の二階に、小六は次の列車にも乘り後れて、僅にそのまた次の列車に乘つた、之を送つた基の眼にも潤ひが見にた。

兄だとて兄らしくもない人の妹は、斯くしてこの寒天に滿洲へ、悲愛深いこ

の兄なる人の妹は、心に花をも錦をも着て故郷へ、互に時雨るゝ廣島驛で泣いて別れた、また會ふことがあらうかあるまいか。

その夜兄妹は、例の心易い廣島の旅館に宿泊つて、翌日馬車で可部に向つた。大阪より廣島、廣島より可部へと、次第〳〵にさびしくなる、お琴はその乘合のかゞ馬車の窓から、始終外面の景色を眺めて、一路坦々と走つて行く沿道の兩側の、松林の處々禿げた丘巒や、蕭條として枝の白い桑園や、刈り取つた跡の水田や、青い芽を吹いて居る麥、蠶豆の畠や時雨は今日全く霽れて、弱い日の光に包まれて紫に霞すむ村落の景色やが、次第〳〵に鄙びて來るのが嬉しく面白く、大阪の繁華、大火、地震、爆發、人殺し、某公爵の遭難など思ふと、宛然で夢のやうで、この夏のあの夜、豐や作や勝等が俥に乘せられて此邊を走つたことを思ふと、またその夢が現實に覺めた心地もする。

安藝の山奥から流れて來る名も優しい可愛川は、兩岸に茂る竹の林と、疎に枯れた楊柳處々、逶迤として、豐裕に見ゆる平野の間を縫ふてゐる、その長い長い橋をば馬車が渉るとき、お琴はその指、指環を眺めて、



「小六姉さんは今頃何處でせう？。」と問ふた。

問はれるまではない、此方から問ひたいのが基の心である。燃ゆるがやうな功名心に囚はれて、幾度かこの道を往復し、落第に落第を重ねて、試驗を咀ひ身を恨み、茲に初めて志望を達して、さて故郷に歸るとなると、これより村落の人となり、我が理想の自治政を擧げんことは嬉しいけれど、司法官とはならずとも、尚二三年は身を警察に處きたい心もして、小山署長や同僚やの、知遇も親切も忘れられない、よし煤煙は深しとも、よし市街は狹しとも、大阪を去るよと思へば、汽車の窓から幾度うしろに振り向いたことぞ、殊に、あのッンとした俠骨の姿、富豪が賄賂も斥けてしまい、妹を妹のやうに見て、我が爲めには神にまで無理なねぎと祈つて呉れたといふ人の、藝妓なればとて、どうして嬉しからざるべき、その兄なる人をば自分が拘引した、そして自分はその人の爲に、且苟ながらも介抱受けた。その人が急に思ひ立つとあつて、泣く〳〵滿洲へ向ふを見送つて、今頃は何處の山川を汽車に搖られて居るであらうとはこの狹い乘り合の馬車の中で、お琴にも勝して、基の思ひ出すところ、否、忘

れられない丈夫の情である。

「さうさ、何處だらうかね……。」

と、基は何氣なく言つたが、急に首を俛れ、また急に外面に覗くと、可愛川の水は滔々として、瀬となるところは碎けて雪の如く、淵となる處は湛へて藍の如な。

「私ね、小六姉さんに約束しましたの、またね、兄さんと一緒に大阪に行きますつて……。」

「さう……。」

お琴はます〳〵小六を語らうとする、基はそれを避けやうとする。相乘りの人は他に三人あつた、その一人、お琴と並んだ老人、茶の中折帽子に眼鏡、田舍のお醫者さんらしのが、

「あんた方は大阪からお歸りでがんすか？。」

と、此方に向いて初めて口を開く、

「ハ、さうでございます。」とお琴がいふと、「何でも大阪には大火事ががんした



さうですが……。」と、田舍人のもの珍しく聞き初める。

基は反つて、小六のことを語しかけられざるを喜び、自分で自分に、旅行案内の地圖を開いて、山陽線の驛を數へ、今頃はもう迅に馬關あたり、明日は玄海灘、京城は此處、遼陽は此處と熟視めてのみ居る。

## 第六十四回

馬車はやがて可部驛に着いた、猗々たる山も川も疇昔に變る處もなく、杏坪先生の詩も思ひ出される。

「高宮郡の南は古の安北、歸馬來り繫ぐ漠部驛、春潮天に連る可愛川、此地馬を舍てゝ小船を買ふ、偶ま逢ふ三月三十日、萬斛の春愁舟裂けんと欲す、流水無情馬よりも疾し、眼に見る流花の艇を追うて下るを、吏人は春も亦閑を得難し、花開き花落つ瞬息の間、斯日依りて東坡老を懐ひ、衾を擁し枕を欹てゝ臥して山を看る」

あゝ、花開き花落つるも瞬息の間、春酣にして古賢の懐も斯の通り、都を背

いて冬の日に、我は故山に、彼の人は滿洲に……、と基が胸は萬斛の愁に裂けんとする。

その可部驛で晝食して、兄妹は此處から草鞋に穿きかへた。

可部驛の驛外れ、右は備後の三次道、左は石州の濱田道、中の細い間道が可部阪峠の徑路、その追分の石標の前まで來ると、先に立つたお琴は、

「ねゝ、兄さん、左の道を鈴張に出ませうか。」と、立ち留まつた。お琴は凱旋の今日三好巡査に救はれ、忠平老爺に追つかけられた、半年以前のあの道が取りたいのである。

「お前、それは三里ばかりも遠いぢやないか、難儀でも眞中の可部阪が宜いよ。」と、基も歩行を停めた。

「遠くても今日は樂に歸れますもの。」

「いや、勘忍して呉れ、僕は可部阪から歸りたいから。」

「いやよ、私はこちらから歸りたいから……、兄さんは何故阪へ歸りたいの？。」

基は莞爾と笑つて、やゝ拗ねたお琴に近づき、



「お前がいふことなら何でも聽かねばならんが、僕は毎時でも阪ばかり越すから、この度及第して歸るにも同樣あの阪が越して見たいの。」

折柄其處の草葺民家の後の徑路から、てか〳〵の禿頭がのつこりと見はれて、何にも知らず、澄した眞顏で來るのをお琴は見るより、突然飛びついて、

「老爺！。」

「ねゝ！」と、喫驚したのは長助であつた。

「まあ、あなたはお嬢さんでがんすかい、あなたは若旦那でがんすかい、まあまあ村では評判でなあ、旦那樣あ有田の奥樣や、潔坊つちやんや、隣家や近處の小作等が、あの峠の一軒茶屋まで迎へに出て居りまさあ、やれ〳〵嬉しやお嬢さん、あなたは、若旦那樣よりも、ねらいと皆人が言ひまさあ……。」と、お琴が手を取つて急に自分が過言たのに心附き、長助は基が顏を眺めて、

「へイ、……、若旦那樣、お目出度いことで……。」

もう罪ない爭はない、三人は中間の徑道を取つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

可部阪峠三里の分水嶺から、初雪の融けて流るゝ露川の水、北に落ればが家の背戸の寛となり南に來れば南原のいさら川となる、その眞白な砂も小石も見わ透されて、潭となり瀬となる水の音さへなつかしく、土橋を渡り飛石を踏み、犬の聲、鶏の歌、相傳へて、長閑な谷間の村閭を過ぎ、麓の茶屋から樫の林を、潜ると轉げても落ちさうな高峰の大盤石に、一帶の松青々と、今日露れ亘つた穹窿に雄渾の大輪廓を寫し出す、その峽を廻り隅を辿り、昨夜時雨れた潦水に、楓の枯葉の吹き寄せられた山路の蜿蜒と、人聲絶にて幽寂なる、蛇が淵の邊に來ると、お琴は足の痛も忘れ、この夏の苦になつた處も忘れ、絶頂の一軒茶屋には親姉弟の待ち詫びて居るのも忘れ、兄が及第の名譽も忘れ、危い露川の對岸の葷の中に名も知らぬ莓の實の赤いのを見出し、

「兄さん、兄さん、あれを取つて下さい、老爺、あれを取つて呉れ。」と、强請み出した。



日は照々と照つてゐる。

基は、斯の山と水との神靈に觸れ、七年の苦悶も鵬の奥から洗ひさられて、一悟解脱の道に出でた心地、喜んで我が親愛なる「妹」の爲めに、その莓を採つて與つた。

小說

# 妹

終

明治四十三年七月三日印刷
明治四十三年七月十五日發行

小說妹

定價金四拾五錢

著作權所有

著作者　小笠原白也

發行兼印刷者　東京市日本橋區通一丁目十七番地　青木恒三郎

印刷所　大阪市西區新町北通一丁目六十五番屋敷　嵩山堂印刷部　電話西七八二番

發行所　大阪市東區心齋橋博勞町角　東京市日本橋區通一丁目角　青木嵩山堂

（大阪）電話東南千五百番　振替口座大阪　貳貳〇番

（東京）電話東本局七八九番　振替口座東京　貳貳八九番

明治四十三年七月　三日印刷
明治四十三年七月十五日發行

著作者　小笠原白也

發行兼印刷者　東京市日本橋區通一丁目十七番地　青木恒三郎

印刷所　大阪市西區新町北通一丁目六十五番屋敷　嵩山堂印刷部　電話西七八二番

小説　妹

著作權所有

定價金四拾五錢

發行所　大阪市東區心齋橋博勞町角　東京市日本橋區通一丁目角

青木嵩山堂

（大阪）電話眞南千五百番　振替口座大阪　貳貳〇番

（東京）電話眞本局七八九番　振替口座東京　貳貳八九番

嵩山堂出版小説

浪六　うき世車　二冊　全
浪六　毒婦　三冊　全
浪六　うき舟　一冊　全
浪六　三人兄弟　二冊　全
浪六　當世女　二冊　全
浪六　當世五人男内　川上三吉　三冊　全
浪六　石田三成　一冊　全
浪六　當世五人男内　吉田雄藏　二冊　全
浪六　うやむや日記　一冊　全
浪六　仍如件　二冊　全
浪六　浪華名物男　三冊　全
浪六　明治十年　一冊　全
浪六　大惡魔　二冊　全
浪六　當世五人男　二冊　全
浪六　武士道　二冊　全
浪六　夜叉男　二冊　全
浪六　當世五人男内　黑田健次　三冊　全
浪六　やまと心　一冊　全
浪六　金剛盤　二冊　全
浪六　日本武士　一冊　全
浪六　最後の　黑田健次　二冊　全
浪六　原田甲斐　三冊　全
浪六　最後の　岡崎俊平　二冊　全
浪六　當世五人男内　倉橋幸藏　三冊　全
浪六　當世五人男内　上田力　三冊　全
浪六　赤蜻蛉　一冊　全
浪六　蔦之細道　一冊　全

- 浪六 武者氣質 一冊
- 全 浮世双紙 一冊
- 全 品定め 一冊
- 全 花車 一冊
- 全 十文字 二冊
- 全 大阪城 一冊
- 全 鬼あざみ 一冊
- 全 古賀市 一冊
- 全 草枕 二冊

- 全 魚屋助左衛門 一冊
- 全 呂宋助左衛門 一冊
- 全 海賊 一冊
- 全 後の海賊 一冊
- 露伴 新羽衣物語 一冊
- 全 三保物語 一冊
- 全 勇魚捕 二冊
- 全 五重の塔 一冊
- 全 さゝ舟 一冊

- 露伴 菊の濱松 一冊
- 全 ひとり寐 一冊
- 全 雲の袖 一冊
- 全 もつれ糸 一冊
- 全 眞西遊記 一冊
- 眉山 神出鬼没 二冊
- 美妙 漁隊の遠征 一冊
- 全 女裝の探偵 二冊
- 全 金忠補 二冊





- 美妙 桃色絹 一冊
- 全 八鬼 一冊
- 全 武者魂 一冊
- 水蔭 戀の浮島 一冊
- 全 海底の噴火 二冊
- 全 廢船萬里號 二冊
- 全 二人女王 一冊
- 全 總攻擊 一冊
- 全 漁師の娘 一冊

- 水蔭 荒鷲の爪痕 一冊
- 全 大暗礁 二冊
- 全 鍋 一冊
- 全 海底の寶庫 一冊
- 全 花 一冊
- 全 女海賊 一冊
- 全 相撲灘 一冊
- 全 荒浪草紙 一冊
- 全 黑雲 一冊

- 水蔭 水車物語 一冊
- 全 空中飛行器 二冊
- 全 大幻燈 一冊
- 全 誰が罪 一冊
- 全 秘密世界 一冊
- 全 秘密の使者 一冊
- 全 地中の秘密 一冊
- 全 新俳優 一冊
- 全 海國男兒 一冊

水蔭 海水浴 一冊
汽車の大賊 一冊
遠山霞 一冊
野蠻人 一冊
水蔭活東 稲妻銀行 一冊
奴之助 由井が濱 二冊
癌 二冊
三人書生 一冊
人の妻 二冊

奴之助 女可恐 二冊
金之冠 一冊
配所の月 二冊
化物屋敷 二冊
浮草物語 一冊
ちから草 一冊
雌龍雄龍 二冊
女の一心 二冊
花山花人 二冊

奴之助 彌生物語 一冊
獅子王 一冊
天仙 善道邪道 一冊
秋聲 地中之美人 一冊
春葉 山櫻 一冊
菲水 山霧 一冊
荷葉 反魂記 一冊
風葉 戀學士 一冊
罪こ罪 一冊





風葉 寒菊 二冊
唐撫子 二冊
白涙女 二冊
自殺と自殺 一冊
阿鼻焦熱 一冊
新發明 一冊
鬼士官 一冊
玉の輿 一冊
造船博士 一冊

風葉 卯花縅 一冊
罪のゆくへ 二冊
横戀慕 一冊
奴島田 一冊
忘れがたみ 一冊
化粧くらべ 二冊
半元服 一冊
奇美人 一冊
戀無常 二冊

風葉 旗すゝき 一冊
女華族 二冊
戀女房 一冊
仰天子 おもかげ 一冊
紅筆双紙 一冊
樂屋銀杏 一冊
大喝采 一冊
丸腰銀次 一冊
三日月形 一冊

## 嵩山堂出版小說

仰天子 からくり的 一冊 松葉 煙草盆 一冊 鐵腸 南海の激浪 一冊

全 小夜千鳥 一冊 全 玄雪姫 二冊 全 明治四十年の日本 一冊

全 梅若心中 一冊 全 微笑小史 近世歴史雪月花内 櫻田の雪 二冊 全 戰後の日本 一冊

全 歌枕 一冊 全 近世歴史雪月花内 筑波の月 一冊 全 啞の旅行 一冊

全 源氏車 一冊 全 近世歴史雪月花内 大和の花 一冊 青莽 谷間の姫百合 二冊

全 弓矢八幡 一冊 鐵腸 雪中梅 一冊 吐芳 黑牡丹 一冊

松葉 無名城 三冊 全 花間鶯 一冊 天外 文錄男 一冊

全 金剛武者 一冊 全 過去の政海 一冊 松魚 若旦那 二冊

全 一夜畫工 一冊 全 落葉のはきよせ 一冊 五圓小說 五圓紙幣 一冊



## 嵩山堂出版雜書

渡邊國武 機外觀 一冊 哄笑子 順智百談 一冊 櫻所 武士道數僉百話 一冊

田岡嶺雲 壺中我觀 一冊 全 お笑ひ草 一冊 洛山堂 日本武士道の神髓 一冊

諸大家 涼簟 一冊 なにがし 滑稽珍文 一冊 藤堂梁城 慨世家詩文歌評釋 一冊

讀賣新聞 明治名士の逸話 茶話 一冊 一讀百驚 妖怪府 一冊 安藤謙吉 偉人の尺牘 一冊

及己 微笑 一冊 全 珍事奇談 一冊 津島松溪 薩駅琵琶 捷風吟 一冊

韮水 新百物語 一冊 奇坊 改良手品 一冊 全 薩駅琵琶 孤月吟 一冊

骨皮道人 滑稽玉手箱 一冊 櫻所 明治百傑傳 一冊 古山獨吟自在 薩摩琵琶歌 一冊

哄笑子 滑稽落語集 一冊 全 吉田松陰 一冊 秋草 薩摩琵琶歌 一冊

全 滑稽三題噺 一冊 全 南龍公 一冊 土岐達 八雲琴獨習之友 四冊

365
161

嵩山堂出版文學

男爵　金子堅太郎君題辭（第一卷及第三卷）
伯爵　東久世通禧君題辭（第二卷）
工學士玉國遂村容吉君作歌　樹智定君作曲

## 琵琶歌

菊判美本第一、第二、第三、各正價壹圓　郵稅貳錢

第一集目次　●豊信●長清●基合戦●敦盛●淡洋島●蟬丸●陰辨慶●袈裟御前●餌御前●梁古の怨涙●吉野靜●木村長門守●吉野山●楽平●惡の路●好諧者●唐中竹●名和長平●知盛●楠狹間●經正●義家●太田道灌●錦明●鞍馬●大江山●神瑞鶴御前

第二集目次　●宇治川●番の花●新年梅●梅若●三人上戸●項羽●白虎隊●虎御前●新年海●平壞●四條畷●山崎合戦●勾當内侍●稻村ヶ崎●佛御前●楯綏●重衡●敦盛●松●旅順の魁●旅順の砲撃●九連城●烈士沖禎介●金州南山

第三集目次　●芳流閣●泉の三郎●備後の三郎●朝比奈三郎●雨乞小町●鶏鳴返し●荒乳の關●矢口の渡●菅公●雲馬遊●佐渡の若竹●夜の鶴●新年山●旅順の朝露●濡衣●伏見の吹雪●降雪●吉野川●名譽の遊●松浦潟●松の廊下●義士の本懷

斯者は筑前琵琶に於て僧流の鼻祖たる旭翁知定氏の爲に著者が全力を振つて作歌せしものにして雅俗の調和面白く、時々の曲調を斷ち、則々の吟聲を洗ふ、若しそれ吟唱することあらば、風韻徐ろに俗氣を拂ふて興快禁ずる能はざるものあらんか、殊に法師旭翁が綿細なる曲譜を施し且つ例を掲げて曲節を解說せし如き周密なる注意は同好者に多大の便益を與へたり

松本香州君著

## 兵營觀

洋裝正價廿五錢　美本郵稅四錢

本書に青年文士が明晰なる頭腦と淡淵たる才氣とを傾注して仔細に說述し流麗の文思はす快哉を叫ばしめ豪壯の氣魄・情の感描き竭して遺憾なく其健全なる志想は士氣を振起し極溢する同情は感興殊に深し是れぞ晩近軍海に於て見る能はざる著作にして幹部は教育の好資料ですべく兵卒諸君は座右の良友とするに足らん乎

## 我帝國の本は海にあり……

波濤に運命を托する…我國民は見よ……

大阪商船株式會社長中橋徳五郎君序文
南風　武市雄圖氣君著作

## 海國百觀

洋裝クロス綴菊判紙美本正價五十錢郵稅十錢

是れ海の日本建設の新氣運に乘じ一時代の要求に應ぜん爲め論述したる一經世の大文字也引例詳博論據確實一識見の新創奇警なる一前人未發の論あり行文の雄宕なる亦た海國一文學の大現象にして我帝國出版界の急先鋒たり海の日本を縱橫より觀察し經正痛快に記述したる本書の如きは稀有といふべし初め時代を知り海國を識らんと欲する者は一讀せざる可らず

# 青木嵩山